



「あなたがいるから わたしがある」

住職

いつのことであったか、心温まるような親子のやりとりを記した言葉に出会いました。進君という子どもがお母さんに「かんじょう書き」を書いてお母さんに見せました。

- 一、市場にお使いに行() 十円
- 一、お母さんのあんまちゃん 十円
- 一、お庭のはきちゃん 十円
- 一、妹を遊びにつれて行きちゃん 十円
- 一、婦人会のときのおるすばんちゃん 十円
- ごうけい 五十円
- お母さんへ

進

これを見たお母さんは、「よくお手伝いをしてくれたわね。ありがとう」と心からほめたそうです。次の日、進君にお母さんからの「かんじょう書き」が渡されました。

- 一、高い熱が出てハシカにかかったときの看病代 ただ
- 一、学校の本代、エンピツ代 みなただ
- 一、毎日のお弁当代 ただ
- 一、さむい日に着るオーバー代 ただ
- 一、進が生まれてから今日までのおせわ代 みなただ
- ごうけい ただ

進へ

お母さん

この文を読んだ時、進君とは「わたし」で、お母さんとは「阿弥陀如来さま」のことではないかと、わたしは実感しました。

「死ぬという事は 消滅してしまうことではなく

いのちのふるりに 帰るだけのことなのです」

と、お念仏のご一生を終えられて、お浄土に帰られた先人の言葉が心に響きます。私一人だけのいのちを生きているのではない。阿弥陀さまと一緒に生きておられます。

二千分の一

福岡 繁治

今から六十六年前、昭和二十年一月二十二日に現役兵として、大阪の法円坂にあった、陸軍第二三部隊に入隊しました。

当時は、アメリカ軍の猛攻撃にあつて、次々と玉砕、また玉砕の連続で敗戦の色が濃く感じられる状況でありました。毎日、戦況が大本営から発表されておりましたが、事実と異なることの報道が多かつたようです。毎日のように戦死の公報が、近隣の村々に伝達されて、悲嘆に暮れる悲壮な家が多くなつてきました。私の兄も二十五歳で戦死しました。

さて、入隊の時、営門から入つて驚いたのは、あの広い練兵場が、私と同じ入隊兵でいっぱいだったことです。後でわかつたのですが、四千人ぐらい居たそうです。今までは、入隊者数は半分ぐらいだったそうですが、この年から一歳年下の者も徴兵されたからです。各自入営する前に、自分の所属する中隊が知らされていたので、そこに整列していると、前の演壇に上がった将校が、開口一番「ここ一週間以内に、近く（隣保）で腸チフスの患者が出た者は前へ出よ」と言われました。私は近くの人が、この病気でなくなつていたので、どうしようかと思ひ深く悩みましたが、軍隊は怖いところだと聞いていたので、

もし、後でそのことが分かつたらどのような目に逢うかと思ひ、不安な思いで列の前にでました。

左右を見ると、私を含めて三人しかおりませんでした。そして、すぐに隔離病棟に連れていかれました。当時は、腸チフスが流行つていたので、こんなにたくさん入隊者がいるのに、たった三人だけ、とは・・・と、前にでたことを後悔しました。病室の窓から見ると、真新しい軍服を着た者（私も新しい軍服を着るはずでした）や、くたびれて継ぎのあつた古い軍服を着ている者も大勢いました。

一人、病室で不安な思いで三日間を過ごし、異常がなかつたので退院させられました。私が所属していた中隊の、真新しい軍服を着た兵隊の姿は一人も見当たらず、何処に行けばよいのか分からないので、入隊時に着ていた服のまま荷物を持って、ただ一人であちらこちら聞きまわり辛い思いをしました。その時のことを今でも思ひ出すことがよくあります。

後で分かつたことですが、隔離されている間に所属していた中隊を含めて約二千人は、台湾へ向かう途中、敵の潜水艦と飛行機の攻撃に逢ひ、護衛艦もろとも撃沈されて全滅しました。そして、入隊から二十日くらい後に約二千柱の遺骨の代わりの御霊砂が白木の箱で帰つてきたそうです。

先に述べましたように、将校の前に出よ、と言われた時、もし前にでていなかったら、私も一緒に海の藻屑となっていたことでしょう。

しかし、前に出たために今日があると思います。今日があるかないかは、前にでたか出なかつたかということになりませんが、このことは、人智の及ぶべきはずもなく、これは、過去世の因縁・業と申しますか、ただ仏のみぞ知るところだと思えます。

今、二千万の一の命を生き長らえさせて戴き、今日まで色々な事を経験しながらも、現在、お陰様で信行寺様と不思議なご縁を頂き、住職様はじめ、学者の諸先生の有り難い御法話を聴聞させて頂くことは、とても有り難く、ただ事ではないと思えます。

遠く宿縁を慶べと
いわれておりますが、
本当に喜ばしく嬉しい
ことです。

合
掌



「浄土を想う」

副住職

今年の冬は珍しく幾度か雪も積もり、寒い日々が続きました。お彼岸が近づくとつれ、ようやく陽射しも和らぎ、春の訪れをおもわせる日も増えてまいりました。昔から「寒さ暑さも彼岸まで」と言われていますが、冬の寒さから解放されるありがたさを、この時期になると感じます。

冬の間中、知らず知らずのうちに身体もこわばり、心までも緊張しがちなのですが、ぽかぽかとした陽射しにその緊張もまた解きほぐされていくようです。

お彼岸というとお盆と同様、お墓参りをして亡くなった家族やご先祖さまのことを偲ぶ、というふうに関連されますが、もともと「彼岸」というのは悟りの世界を意味するのです。「此岸」（こちら側）にいる私たちが迷いの世界を離れて彼岸である悟りの世界に到ること。つまり、それは浄土という仏さまの世界です。

しかし、私たち現代人にとって、その浄土の存在を身近に感じにくくなっているのも事実だと思えます。

むかしの日本人は西に沈み行く太陽に浄土のイメージを重ねて、いのちの帰り行くところ、としての浄土を感じました。

観無量寿経のなかに「日想観」というのがあります。

西の空に沈みつつある真つ赤な夕日を見つめながら心を鎮め、浄土の世界を觀ずる修行です。西方浄土といいますが、實際、お彼岸の時には太陽はちょうど真西の方向に沈みます。

数年前、お彼岸に大阪の四天王寺に行つたのですが、境内から西門の間に沈み行く夕日を見たことがあります。今は家やビルが立ち並んで、その向こうに海は見えませんが、聖徳太子がお建てになつたころは海に沈む太陽を望むことが出来たそうです。古くからお彼岸に夕日を拝する伝統があつたのですね。

西方、落日、お浄土。こういう連想が昔の人のなかにはあつたと思うのです。

西方というのは日本からいえばシルクロードやインドがあり、仏教や様々な文化伝来のルートという意味においても、なにかロマンを感じます。

子供の頃見たテレビ番組に、孫悟空や三蔵法師の出て来る「西遊記」がありました。その主題歌「ガンダーラ」はとても印象的でした。

「そこに行けば、どんな夢もかなうというよ。誰もみな行きたがるが、遙かな世界。

その国の名はガンダーラ、何処かにあるユートピア
どうしたら行けるのだろうか、教えて欲しい。」

西の彼方にある理想郷。ここを離れた何処かにありそうな、そのユートピアに、なにか憧れのような感情を抱いたものですが、かつて仏教が栄えていたという国ガンダーラは、今のパキスタンやアフガニスタン。仏教遺跡さえ破壊され、争いの絶えない国になつてしまつています。まさに諸行無常です。

自分を離れた何処か外に、ユートピアのような浄土という世界を探しても、結局どこにも見つからないのかもしれない。

「月かげのいたらぬさとほなけれども　ながむるひとのこころにぞすむ」

という法然上人の歌があります。月の光は分け隔てなく世界中を照らすけれど、もし、その月を眺めることがなければ、その存在に気づくこともない。反対に、月を眺める人にとつては、月の光に照らされている事実は疑いようのないことです。法然上人は月の光を阿彌陀さまの光明、浄土のはたらきに喩えられました。阿彌陀さまの光明は遍く十方世界を照らし続けておられますが、そのはたらきに出逢つて初めて、私にとつての浄土が真実のものとなるのではないのでしょうか。南無阿彌陀仏の念仏こそが、そのはたらきに他なりません。

☆お寺でヨガ☆

信行寺の皆さんと、ご縁を頂いてから、早九年あまりが過ぎました。

当時、神戸はまだ大震災の傷跡が色濃く残り、心も体も大変な日々でした。しかし、信行寺の皆さんは、信仰を通し、精進されて、精神的にもゆとりをもって、なごやかな雰囲気の中で、ヨガを実践されてきました。

月二回のレッスンですが、お陰様で、皆さんそれぞれ腰痛や、ひざ痛等、緩和されて喜ばれています。私も皆さんとお会いするたびに元気を頂いて、幸せな気持ちになり感謝いたしております。

このヨガ美療体操は、ヨガの呼吸法と、体操法を取り入れた健康体操です。日常生活の偏りを正し、姿勢を整え、全身の血行を促進し生活習慣病を予防します。また、性別や年齢に関係なく、どなたでも自分の呼吸に合わせて、無理なく身体を動かし、自律神経を調整します。

私達、ヘルシークワハラ神戸では、ヨガ美療体操を行なうにあたっての心構えとして、食事・心・動きを基本にして、実行することを大切にしています。食事はバランスの取れた正しい食事法・心は主に感謝の心・動きはヨガやウォーキング、家事などすべて身体を動かすことです。このどれかひとつでも欠けると、健康な身体は、維持できません。

そこで生涯学習として、ヨガ美療体操を継続し、これからの高齢化社会に向けて、健康の輪を広げ、皆さんと共に健康で楽しい日々を送れる様、微力ながらもお役にたてればと思っております。

今後ともよろしくお願い致します。

ヘルシークワハラ神戸

井上 千代子

信行寺ヨガ同好会

第二、四 木曜日

二時から三時半まで 礼拝堂にて
年齢を問わず、どなたでも楽しめるヨガのプログラムです。腰痛、肩こりの予防にはとても効果があります。
体験、見学はいつでも大歓迎です！



中央左 井上千代子先生

進学の季節

米田 悦子

春には、我が家の長男が中学に進学いたします。つい、この間ランドセルを購入して、大喜びしていましたの・・・お陰様で大きな問題もなく、卒業を迎えました。

小学校卒業にあたり、思春期セミナーが保護者向けに開かれました。最近の中学生は、インターネットや、携帯電話のサイトを通じて、あふれんばかりの情報に翻弄される宿命にあるようです。もちろん善い情報もありますが、悪の情報も氾濫しているのです。むしろ、規正のないインターネットの世界は、使い方を間違えると、善悪の定まらぬ子供たちには、有害です。人間の悪意も目の当たりとなることでしょう。

しかし、遅かれ早かれ子供達も現実と折り合いをつけなくてはなりません。それまで、保護者は、気を配り、物事の道理を示し、共に考えていくこととなります。

しかし、大人でさえもこのインターネットやメールにのめり込んでしまうほど、社会問題となっています。

人間の煩惱は、自覚しない限り深く深くなるばかりです。どこまでいっても尽きることもなく、影のようにこの私に寄り添ってきます。大人でもコントロールできずにいるのに、子供ならなおさらです。立派な大人になることは、どんなことなのでしょう。

世間でいう知恵は学校や社会で習い、実践を要求されます。成功すれば良い生活ができるかもしれません。一方、仏教でいわれる智慧は、世間の知恵とは全く違います。人間として生きることが、「煩惱に追われ、執着し、手に入れること」の繰り返しでは、決してないということに気づかせてくれます。大人も子供も現代にあつて、どこへ向かって生きるのか、指針をはっきりもたなくては虚しいばかり。煩惱をもつ身であるのだから、自覚して、使いたいようを心得てこそ、立派な大人になれる、ということなのでしょう。

希望のある社会を築くには、親も子も共に育ちあい、思春期の子供達の背中をあたたく押してあげたい、そんな思いでいっぱいこの頃です。



第二十七回「本山念仏奉仕団に参加して」



空 早苗

昨年十一月十二
十三日の二日間

御本山本願寺の

清掃奉仕団に参加さ

せていただきました。今回、初めての参加でしたのでドキドキでした。参加者十六名で、初めての参加者は二名（平本晶子さんと私）でした。

第一日目、本願寺聞法会館で昼食をいただき、エプロン姿に着替え、御影堂で開会式が行われました。全国から多くの門徒のみなさんが参加されておられました。

御影堂、阿弥陀堂の畳を皆さん一斉に拭き掃除をさせていただきました。その後、対面所（鴻の間）でお抹茶の接待を頂きました。また国宝の書院内部や「飛雲閣」を拝観させていただきました。すべて一般では見学できないところですよ。ご奉仕させていただきます。是非見学したいと思っていたのでおかげです。是非見学したいと思っていた「唐門」で写真を撮り感激でした。

百華園（ご門主様の私邸）に於いてご門主様との御面接・記念写真をさせていただきました。夕食後ご法話を聴聞して、その日は終了しました。

朝食後、百華園と御影堂前の樹齢三百五十年は過ぎているといわれている大銀杏のまわりを掃除させていただきました。閉会式において、奉仕団として十回参加された赤坂亥才男さん、敏子さんご夫婦と十回参加の小林登志夫さん、渡辺由子さんに表彰状が授与されました。おめでとうございます。

午前で無事、念仏奉仕が終わり、昼食は妙心寺の大心院で精進料理をおいしくいただきました。初めて参加させていただきました。無事努めることができるかと不安でしたが、皆さんのご助言と

ご協力のおかげでお勤めを終えることができました。本当にありがとうございました。

合掌

今年十月二十七日（木）二十一日（金）に参加いたします。親鸞聖人七百五十回大遠忌法要の記念すべき年です。皆さん、一人でも多くご奉仕させていただきます。



信行寺行事予定とご案内

はなまつり

四月十日（日）

一時より 子供花まつり
（礼拝堂）

二時より 住職の法話
（本堂）

門信徒会総会

四月三十日（土）

午後二時より四時

おつとめ、総会、法話

永代経法要

五月二十八日（土）

二十九日（日）

両日とも二時から四時です。
皆様、どうぞ参りください。



三月十一日午後二時四十六分、東北地方で大地震とそれによる大津波があり甚大な被害が生じております。あつという間に、町が大津波に襲われて壊滅してゆく、その瞬間をどのテレビ局も何回も繰り返し放送してました。先年、スマトラ島沖で発生した大津波の瞬間をテレビで見ましたが、それと同じ光景が岩手県、宮城県の三陸海岸を中心にした沿岸一帯でおきたのです。三月十一日におきたことです。

「東北地方太平洋沖地震」と名づけられましたM9、震度7を超える国内最大の超大型地震と、それによる大津波、その被害は北海道から高知におよぶ広い範囲におよんでいます。地震学者でさえ予想をこえた大地震。人間の予測をこえた自然の力にただ驚愕し、呆然となるだけです。罹災された方々と亡くなられた方々に、衷心よりお見舞いと哀悼の意を申し上げます。

平成七年の阪神淡路大震災で罹災した経験のあるわたしたちには、そのときのことやよみがえってきます。罹災し、一瞬にしてお寺が灰燼に帰し、すべてを失ったときのこと、亡くなられたご門徒の焼け跡を訪ね、言葉にならない悲しみのなかでお勤めをしたこと、これからのことを考える余裕もなかった日々。そういう毎日でした。

わたしたちが当てにしている人間の知性は、経験や知識以外のことに対しては手も脚もありません。ただうろろうするばかりです。

大事な自分の人生を思うとき、人間の知性をリードし、虚しくない人生をおくらせてくれるものを持つことの重要さを実感いたしました。それがわたしから眼を離すことなく見守り続けてくださる阿弥陀様の眼でした。仏の智慧です。

わたしたちは人類と呼ばれる地球上の動物の一種ですが、同時に人間と呼ばれていることを忘れないようにしたいものです。生まれたこと、生きること、死ぬこと、そこに与えられたいのちの意味を感じてこそ人間の価値があるのではないでしょう。

大自然の力をまざまざと見せ付けられたこの度の大地震を、わたしたちは無駄にしないようにしたいものです。

（住職）